

# 原点としての「イヘ」

川井博義

## 序

現代を生きる私たちは、「家族」「家庭」といった言葉在日常的に使用している。昨今、この「家族」「家庭」をめぐって、様々な言説がなされている。例えば、過去の家族制度の実態とその変遷に関わる論及や、現在の「家族」「家庭」をめぐる状況を調査・検証し問題提起するものなどが挙げられよう。それらの多くは「家族」「家庭」という事柄を自明なこととして論を進める立場に立っていることがある。このような立場からなされる議論においては、「家族」「家庭」とは、何者にも先立つ個人が参集することにより構築されるものであるという前提が問われることはない。

「家族」「家庭」という熟語に用いられている漢語「家」は、今から約一三〇〇年前、倭語「イヘ」を表記する際に用いられている。現代の私たちが用いる「家族」「家庭」の語と、そもそもの倭語「イヘ」とは、その後の担う背景としての思想が異なる。このことは、現存する最古の和歌集である『萬葉集』からうかがい知ることができる。本稿は、漢語「家」を用いて表

記された倭語「イヘ」に着目し、そもそも、「イヘ」とはいかなる意味の語であったのかを明らかにする。倭語「イヘ」を踏まえた上で、現代用いられている「家族」「家庭」について問い直すことが、本稿の目的である。

### 一 「イヘ」タビ」と「ふたり」ひとり」

『萬葉集』では、「家」と「旅」とは対比的に表現されており、この表現形式は「旅」の不安や悲嘆を開放する意味を有する「家」旅」構造とも言うべき表現であることが、伊藤博氏<sup>(1)</sup>によって指摘されている。例えば次のような歌がある。

家にあれば箭に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

(巻二、一四二、有間皇子)

家離り旅にしあれば秋風の寒き夕に雁鳴き渡る

(巻七、一一六一)

一四二は、家にいるときは立派な器に盛りつけてお供えする飯であるが、旅路にあるので飯を椀の葉に盛るという意である。一一六一は、家を離れ旅路にあると、家からの使者であるという雁が鳴きながら渡つていくとの意である。一四二では、家であれば旅にある今よりよいということが歌われる。一一六一では、旅があつて家に恋いこがれていることが歌われている。いずれも旅先にて家进行う歌であり、「家」と「旅」とが対比的に示されている。

このような「家―旅」構造を有する歌や歌群は、いずれも旅先にて家进行う歌であり、家で旅进行う歌ではない。家での退屈を逃れるために、旅に出ることを望む歌などは見られないのである。萬葉人はいつも、旅先にて、家进行わずにはいられないと歌っている。これは一体どうしてであろうか。なぜ「家」と「旅」が対比的に語られているにもかかわらず、旅先で家进行う歌ばかりであり、家で旅进行うような歌はないのだろうか。そもそも、萬葉人にとって「家」や「旅」とはいかなることなのであろうか。

現代の私たちは、旅とは煩雑なる日常の困苦や退屈を逃れ、非日常に身を投じて遊興することであると考えることもある。その意味での旅は、必ず日常へ帰還することが保証されていることを前提としている。しかし、旅をこのようなものとして捉える発想は、日本思想史全体を鳥瞰するとき、比較的近年に生じたと推定することができる。

例えば、伊藤益氏<sup>10</sup>によれば、鎌倉期の遊行僧一遍にとつて

旅とは、二切を捨離・放下して在る様態と、現生に拘泥する意識とのあいだの距離を、後者が前者にどこまでも引き寄せられる形で、可能なかぎり縮小させようという意図に根ざすものであり、欲求・欲望の捨棄とそれは同義であつたという。これに従えば、一遍にとつて旅とは、「我」性（欲望・欲求）を空無の中に捨棄する行であつたことにならう。

また、近世の旅について、八木清治氏<sup>11</sup>は、次の三つの概念を用いて分類している。一つは、「広く見ること、観察すること」に主眼を置いた「旅を指す」「遊観」、二つ目は、「自由な身で学問や芸術の修行のために長期間、しかも広域に及んで」行う旅を指す「遊歴」、三つ目は「特定の地に長期間滞在して、私塾などの教育機関に出入りして学問や技芸の習得を目指した」旅を指す「遊学」である。一つ目の「遊観」、すなわち、「広く見ること、観察すること」に主眼を置いた「点」に、非日常性を見いだし、旅とは日常を離れることであると意味が転じたならば、旅とは煩雑なる日常の困苦や退屈を逃れ、非日常に身を投じて遊興することであるという現代の私たちが用いる意味での旅を想起することも容易であらう。しかしながら、近世における「遊観」は、日常からの離脱ではなく、あくまでも広く見聞し知見を広めることを目的としていたのである。

これらの先行研究を踏まえると、近代以前において、旅とは、煩雑なる日常の困苦や退屈を逃れ、非日常に身を投じて遊興することではなかつたのではないかと考えられる。ここではまず、現在遡源することができる最古の和歌集、『萬葉集』から、倭

語「タビ」とはいかなる思念に基づく語であるかを検討する。  
萬葉人にとつて、旅とは、知見を広めることもなく、我性を空無の中に捨棄する行でもない。『萬葉集』には、次に挙げ  
る歌が収録されている。

引津の亭に船泊りして作る歌七首

草枕旅を苦しむ恋ひ居れば可也の山辺にさを鹿鳴くも

(卷十五、三六七四)

沖つ波高く立つ日にあへりきと都の人は聞きてけむかも

(卷十五、三六七五)

右二首は大判官。

天飛ぶや雁を使に得てしかも奈良の都に言告げ遣らむ

(卷十五、三六七六)

秋の野をにほはす萩は咲けれども見る駿なし旅にしあれば

(卷十五、三六七七)

妹を思ひ寐の寝らえぬに秋の野にさを鹿鳴きつ妻思ひかねて

(卷十五、三六七八)

大船に真樺しじ貫き時待つと我れは思へど月ぞ経にける

(卷十五、三六七九)

夜を長み寐の寝らえぬにあしひきの山彦響めさを鹿鳴くも

(卷十五、三七八〇)

これらは、『萬葉集』卷十五の遣新羅使人歌群のうちの七首

である。この第一首、三六七四に「旅を苦しみ」とあり、旅は苦しいものであることが明言されている。では、なぜ苦しいと歌われているのだろうか、どのようなことが苦しいと考えているのだろうか。ここではまず、その苦しみの内実を明らかにしなくてはならない。

遣新羅使とは、朝鮮半島にあった新羅に派遣された使者のことである。それぞれの歌群に対し、使者たちの手による歌を実録したものなのか、あるいは、後の編者によつて脚色・創作された歌物語なのかという議論がある。現在では、部分的に脚色され追加され全体を整えた痕跡のある歌が混在していることが明らかにされている。とはいえ、すべてがそのようなものかは不明である。ここでは、そのような歌の背景や構成の議論ではなく、この七首一連の歌の内部から看取することのできる萬葉人の旅に対する思念を検証する。

題詞に「引津の亭に船泊りして作る歌」とあり、これに従えば、現在の福岡県糸島郡付近、糸島半島の南西沿岸に位置する引津の亭に宿泊した際の歌であることになる。冒頭の二首の左注に「右二首は大判官」とある。すなわち、二首は使者一行の中の  
大判官（副使に次ぐ高官）の歌である。遣新羅使は各地において宿泊しつづつ海を渡った。その宿泊地の一つがこの引津の亭である。また、大判官という官職名があるように、任命を受けた官人が一行を成してこの旅に臨んでいる。

三六七六に、旅とはどういうことであるかが具体的に提示されている。一首は、秋の野に咲きほこる萩が咲いているが、旅

に出ており共にその萩を見る人がいないので、見る意味がないとの意である。萩が咲いたけれども、今は「旅」であるから萩を見て意味がないと歌われている。このことは、三六七七に「見る験なし」とあり、萩がせつかく咲いているのに、見たところで意味がないと明示されている。「萬葉集」巻七に、

玉垂の小簾の間通し獨居て見る験なき夕月夜かも

(巻七、一七三)

という一首がある。この歌は、次のように解することができる。「ふたり」共に在り、ある対象(月)を見ることができれば、その対象には意味がある。しかし、共在不可能な状況、すなわち「ひとり居て」それを見たところで意味がないのである。このことを踏まえると、三六七七において萩に対し「見る験なし」と歌う背景にある思念が明らかとなる。萩を見る意味がないのは、「ふたり」共に在り共にそれを見ることのできないからである。ここでは、萩を見る意味が失われた理由として、「旅にしなければ、すなわち、「旅」にあるがゆえに、という明確な理由が示されている。これらを合わせて考えてみると、旅とは「ひとり」であることだということになる。つまり、「旅」とは、共在不可能であることを意味するのである。このことは、三六七八に「妹を思ひ」寝ることができないと述べられていることから明らかである。「妹」背」という一体的な「ふたり」のいずれかが旅に置かれた場合、「ふたり」は共に在ることが

できず「ひとり」である。旅におかれることは、共に在ることができないことを意味するのである。

次に着目すべきは、三六七四の「旅」の原文は「多婢」であることである。ここでは、現在一般に用いられる意味での旅と、萬葉人が示すような共在不可能であるという意味とを区別するため、以下、萬葉人のそれを「タビ」と表記する。

「ふたり」のいずれかが「タビ」に置かれた際、共に在ることができない。「タビ」とは、「ふたり」共に在ることができないことに他ならず、それは希求するような事柄ではない。萬葉人は、共に在ることができない「タビ」におかれたとき、共に在る状態へ回帰することを希求するのである。萬葉人が「タビ」を苦しいことであると歌う際の苦しみとは、共に在ることができない苦しみに他ならない。

先に「萬葉集」において家と旅とが対比的に歌われている。「家」旅」構造と呼ぶべき構造を有する歌が散見されることを指摘した先行研究を挙げた。「タビ」は「ふたり」共に在ることができない「ひとり」の苦しみを伴うことであるならば、それに対し「イヘ」は「ふたり」共に在ることができるとあることを指すであろうことが推定できる。このことは、「見る」とことと密接な関係を有している。

大刀の後玉纏田居にいつまでか妹を相見ず家恋ひ居らむ

(巻十、二三四、秋相聞)

一首は新田を開拓するために田庄に来ており、長い間妻と逢っていない男の歌である。「この田で一体いつまでいとしいあの子と逢わずに家恋しく思つて居ることになるのだらうか」との意である。男は「イへ」から離れ「妹」と共に在ることができない状況にある。「ふたり」ではなく「ひとり」なのである。ここで「妹」と逢っていないことを「相見ず」と表現していることに着目したい。ここでは、妻を「相見」ることができず、お互いを「見る」ことができないと歌われている。お互いを「見る」ことによつて把握し合うことにより、一体的な状態、「ふたり」共に在ることが確認できる。すなわち、お互いを「見る」ことにより「知る」ことができ、「ふたり」共に在ることが確認される状態が「イへ」なのである。

すると、その「イへ」と対比されて歌われる「タビ」とは、お互いを「見る」ことにより、「ふたり」共に在ることが確認できる状態であろう。このことは、

去家なほ而妹を思ひ出でいちしろく人の知るべく嘆きせむかも

(卷十二、三二三三、「羈旅發し思」)

里離り遠くあらなくに草枕旅とし思へばなほ恋ひにけり

(卷十二、三二三四、「羈旅發し思」)

という歌から明らかになる。三二三三は、「旅に置かれたら妻を思い出し、周りの人がはつきりとわかるほどに、嘆くことで

あろうか」の意である。「タビ」に向かう前に、「タビ」に置かれたときの思いを予想し歌つた男の歌である。三二三三の「タビ」の原文は「去家」である。これについて伊藤博『萬葉集釋注』は、「旅」の原文「去家」は、家(妻子・家族)を離れて異郷にあるのが「旅」であることを示す表記であると指摘する。ここでは次の三二三四にある「里離り」という語と共に「タビ」とはいかなることかを検討したい。

三二三四では、「里を離れてさほど遠くに来たわけではないのに、旅に置かれていることを思うと、やはり恋しくてたまらない」と歌われている。実際に「タビ」に置かれたとき、男は妻と共に寝ることはできない。「タビ」に置かれたことを意識すると、恋しく思わずにはいられない。歌には何に恋するかについて明示されていない。しかし、妻であり里であることは容易に推測することができる。「里離」ることによつて、共に寝ることができないうち、「タビ」に置かれたことを意識し、男は「イへ」すなわち「ふたり」共に在ることが保証されている状態を希求するのである。すなわち、「タビ」であることを意識したと歌う三二三四に、「里離り」と、里を離れたことが明示されているのである。男は「タビ」に置かれたことを意識し、「ふたり」共に在ることができないからこそ、「ふたり」共に在ることのできる「イへ」(妻と共に在ること)に恋いこがれるのである。「妹―背(妻―夫)」が「ふたり」共在している状態が「イへ」であり、「ふたり」が分離し「ひとり」となり、在ること(共在)ができないことを「タビ」というのである。

「ふたり」共に在ることができるのは、「里」や「家」においてであろう。男にとって共に在るべき者は「妹」である。三三四において、男は「恋ふ」対象を明示していない。男が恋しく思っている対象は「里」であり「家」であり「妹」であり、厳密に何に對し恋いこがれていると言ふことはできない。男は共に在ることができる状態へ回帰することを切望している。

このように、共に在ることができている状況が先在してこそ、共に在ることができない状態というのは生ずる。つまり、「タビ」において「イへ」を思うことは、「タビ」の前に「イへ」（共に在ること）が成立していてこそ可能なのである。先に共に在る状態である「ふたり」が在る。これは相手を「見る」ことによりお互いを把握することで確認される。「ふたり」共に在ることができないとき、すなわち、相手を「見る」ことができない状態に置かれたとき、「ひとり」となる。「タビ」に置かれ「ひとり」となった者は、「ふたり」共に在ることができる「イへ」を希求するのである。

「イへ」とは、「ふたり」が成立し共に可能であった既知なる状況であり、「タビ」に置かれ、「ふたり」が隔離された際、それは回帰すべき状況として歌われる。また、「イへ」とは共に在る者どうしがお互いを「見る」ことにより、共に在ることを確認することができるのである。以上のように、「イへ」と「タビ」の対比構造から、「ふたり」と「ひとり」、すなわち、共在と非共在という、在ることに対する萬葉人の思念を看取することができるのである。

### 三 「イヘータビ」の思想

萬葉人は「タビ」に置かれたとき、「イへ」を希求した。その際、共に在るべき者（妹）（背）、共に生活していた家屋（家）や、その住居のある土地（里）などに思いを馳せた。すると、「イへ」とは、共に在るべき者と共に在り、共に生活する家屋や土地、そこに住む者たちをも想起させる語なのではないかと推論することができる。では、萬葉人は「イへ」とはいかなることであると思念していたのだろうか。

都にある荒れた家にひとり寝は旅にまさりて苦しかるべし  
（卷三、四四〇、大伴旅人）

今挙げた歌は、妻を失った大伴旅人が、大宰府にて歌った三首のうちの一首である。大意は、「都にあるすさんでしまった家で「ひとり」寝ることになれば、今の「タビ」で寝ることよりもずっと苦しくつらいことだろう」ということである。

「タビ」に置かれた者は、「ふたり」共に在ることを「見る」ことによつて確認できる状態である「イへ」を希求していた。「タビ」とは「ふたり」共にできないことであり、苦しいことに他ならなかった。しかしながら、旅人はここで、大宰府から都にある家に帰還したところで、それは旅より苦しいことだろうと予期しているのである。

旅人は大宰府から帰京の途、敏馬の崎（現在の神戸港の東付近）において、

妹と来し敏馬の先を帰るさにひとりし見れば涙ぐましも

（巻二、四四九）

行くさにはふたり我が見しこの崎をひとり過ぐれば心悲しも  
一には「見もさかず来ぬ」といふ

（巻二、四五〇）

と歌う。「妹」（妻）と共に「ふたり」として在り、共に敏馬の崎を見ることに意味があつた。しかし、今旅人は「ふたり」共に敏馬の崎を見る事ができない。敏馬の崎は妻と共に在る事ができないと旅人に強く意識させるものでしかない。「ふたり」ではなく「ひとり」であり、共在し共存することはできないと旅人は痛感しているのである。天平二年（七三〇年）、旅人は帰京する。

故郷の家に還り入りて、即ち作る歌三首

人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり

（巻二、四五二）

妹としてふたり作りし我が山齋は木高く茂くなりけるかも

（巻二、四五二）

我妹子が植ゑし梅の木見ること心むせつつ涙し流る

（巻二、四五三）

旅人は大宰府にて、帰京後、家で「ひとり」寝ることになつたら、旅において「ひとり」寝ることより苦しくつらいことだろうと予期した。その予期は帰京した今、現実となる。四五二で旅人はみずからの家を指して「空しき家」と呼んでいる。なぜ「空しき家」なのだろうか。その要因として考えられることは、妻と共に在ることができないことがまず挙げられる。

萬葉人は旅先において、共に在るべき者と共に在ることができない状態に置かれたとき、恋いこがれるのは「ふたり」共に在ることができざる状態、すなわち「イヘ」であつた。旅に置かれた者が「イヘ」（共に在ること）を希求することが可能であつた前提には、「イヘ」に回帰することができたならば、「ふたり」共に在ることができるといふことが想定されていた。

旅人は大宰府にて妻を失つた。「作りし」（四五二）「植ゑし」（四五三）と過去「ふたり」共に行つた事柄を想起することはできても、今後、未来において「ふたり」共に何か行ふことはできない。旅人はいま・ここで「ふたり」共に在ることができず、これから先、妻と共に「ふたり」共存することができない。旅人は「ひとり」である。今後、旅人が妻と共に「ふたり」何か行ふことに対する望みは断たれている。妻と共に作つた庭の世話を「ふたり」行つたり、梅の木を共に見ることはできない。

旅人は妻と「ふたり」共に在るべき「イヘ」を希求することはできない。旅人は帰京し、みずからの家屋に帰還したにもかかわらず、「ふたり」ではなく「ひとり」なのである。旅人は帰宅した。しかし、そこは共に在ることが可能な「イヘ」ではないのである。家屋はあるが、それは単なる家屋であつて、妻と共に「ふたり」在る状態、すなわち、「イヘ」ではない。このことを「イヘ」性の消失と呼ぶならば、「空しき家」とは、旅人による「イヘ」性の消失の言明に他ならない。

「ふたり」共に在り共に過ごした家屋に、今、旅人は妻と共に「ふたり」在ることはできず「ひとり」である。家屋は同じであるが、その家屋はもはや「イヘ」ではない。帰京を果たし、みずからの家屋に居るもかわらず、旅人は「タビ」に置かれたままなのである。「タビ」にあるとき萬葉人は「イヘ」を希求した。しかし、今、旅人は「イヘ」を希求することはできないのである。

「タビ」であればいつか帰還すべき「イヘ」を希求することができるはずである。しかしながら、今、旅人は帰宅したにもかかわらず、妻と共に在ることはできない。帰還すべき家屋に在るにもかかわらず、「イヘ」を希求することができないのである。旅人が「旅にまさりて苦しかりけり」と歌つたのは、原点としての「イヘ」（共に在ること）を希求し得ないことを痛感したからに他ならない。

『萬葉集』巻五には、山上憶良による「日本挽歌一首」が収められている。

#### 日本挽歌一首

大君の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国に 泣く子なす  
慕ひ来まして 息だにも いまだ休めず 年月も いま  
だあらねば 心ゆも 思はぬ間に うちなびき 臥やしぬ  
れ 言はむすべ 為むすべ知らに 石木をも 問ひ放け知  
らず 家ならば かたちはあらむを 恨めしき 妹の命の  
我をばも いかにせよとか にほ鳥の ふたり並び居  
語らひし 心背きて 家離りいます

(巻五、七九四)

#### 反歌

家に行きていかにか我がせむ枕付く妻屋さぶしく思ほゆべ  
しも

(巻五、七九五)

はしきよしかくのみからに慕ひ来し妹が心のすべもすべなき  
悔しかもかく知らませばあをによし国内くぬちごとく見せまし  
ものを

(巻五、七九六)

妹が見し棟たかの花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干ひなくに

(巻五、七九八)

大野山霧立ち渡る我が嘆なげ息嘯おきその風に霧立ち渡る

(巻五、七九九)

神龜五年七月二十一日筑前國守山上憶良上



井村哲夫「報凶問歌と日本挽歌」<sup>(5)</sup>は、左注にある「神龜五年七月二十一日」という日付に着目し、一首に「当日の日付を付けて献上したということは、やはり二一日という日が旅人とその亡妻にとつてことさらな意味を持つ日であったことを推察せしめる事情である」と指摘し、その意味とは、旅人の亡妻、大伴郎女の百日の供養であったと推定している。これに従い、日本挽歌は旅人の亡妻大伴郎女の百日の供養にあつて旅人に呈上されたものであると見るのが穏やかであろう。

この憶良の日本挽歌をめぐり、大きな問題が二点ある。一点目は、日本挽歌における「妹」とは誰であるのかという問題である。一首は、妻を失つた夫の嘆きが歌われている。この妻とは憶良自身の妻であり、憶良はみずからの妻のことを歌つたと解する説と、ここで歌われている妻は大宰府着任直後に亡くなつた旅人の妻であり、憶良は旅人になり代わつて歌つたと解する説がある。先に示した推定が妥当であれば、歌中の「妹」は、旅人の亡妻、大伴郎女であり、その百日の供養にあたり憶良は旅人になり代わつてその思いを歌つたと解するべきであろうと思われる。

二点目は、七九四の「家ならば」の「家」は、筑紫の家屋のことか奈良の家のことかという問題である。大きく分けて、「かたち」を亡骸と解釈し、「家ならばかたちあらむを」を、「家屋の中に妻の亡骸だけはあるだろうに」という意味とする説<sup>(6)</sup>と、「かたち」を姿・容姿と解釈し、「家ならばかたちあらむを」

を、「奈良の家にいたならしつかりした姿であつたらうのに」という意味とする説<sup>(7)</sup>の二つがある。

この議論は、「家」を、家屋の意味であると把握し、その語が指し示す具体的な場所（筑紫か奈良か）を明らかにしようとする立場から行われている。これは、一点目の議論や、旅人の妻が亡くなつた時期を推定するための議論との関わりが深いことから、枕詞「あをによし」が冠せられている「国内」<sup>(くわち)</sup>（七九七）とはどこであるか（筑紫か奈良か）、「棟の花」<sup>(たかね)</sup>（七九八）はどこにあるのか（筑紫か奈良か）という問題と共に論じられている。本稿はこれらの議論が前提としている「家」とは家屋の意味であるという点を、これまで明らかにした萬葉人の「イヘ」という思念に基づき問い直す。

四五一において、帰京後の旅人は、自邸に帰宅する。その際、家屋はあるが、それは「ふたり」共に在ることができる「イヘ」ではないことを、「空しき家」と歌つた。「イヘ」は単に家屋を意味するものではなく、共に在ることであり、今後とも共に在ることが保証されるべき（そのことを希求できる）状態であつた。旅人は大宰府にて妻を亡くし、帰京後、みずからの家屋に戻つた。亡妻と共に在ることはできず、今後共に在る可能性は失われた。よつて、共に在ることを希求することはできない。みずからの家屋は「イヘ」ではなかつた。このことを旅人は「空しき家」と歌つたのである。すなわち、旅人は「イヘ」を失つたのである。このことを念頭に置きつつ憶良の歌を検討すると、次のことが言える。

まず、七九四では、「にほ鳥」の比喩を用いて、「ふたり並び居」と歌われている。共に在り、共に何かを行うことができる状態が「ふたり」であり、「イへ」に他ならない。「ふたり」共に在ることは、お互いに「見る」ことよって確認することができる。七九四の「家ならば」とは、次のように解することができる。「イへ」すなわち、「ふたり」共に在ることができ、状態ならば、お互いに相手の「かたち」（姿や様子）を「相見」ることにより、共に在ることを確認することができる。「かたちはあらむを」は、妻が亡くなる前、お互いに「相見」ることにより、お互いに姿かたちを確認することができたことを意味する。つまり、妻の生前、お互いを「見る」ことにより確認することが可能であり、それによって「ふたり」共に在ることが保証された。さらに、「ふたり」は、共に何かを行うことが可能であった。しかしながら、今、妻を失った者は、「ふたり」ではなく「ひとり」であり、「ふたり」へ回帰することも望み得ない。

共に在るべき相手を視覚的に確認することができ、「相見」ることよって、共に在ることが保証された状態、それが「イへ」であった。七九四において、妻は「家離りいます」、「イへ」を離れて行ってしまわれたと歌われている。妻が「家離る」ことにより、「ふたり」は共に在ることができない。妻に残された夫は、「ふたり」共に在ることを希求し得ない。お互いを「相見」することは不可能なのである。

次に、七九五には「家に行きて」とある。そもそも「イへ」

とは共に在ることができている状態であり、「タビ」すなわち、共に在ることができない状態において希求される「帰る」べき場所であった。しかし、ここには「行きて」とある。先ほど見たように、旅人は帰京後、「空しき家」（四五二）とみずから家のことを呼んだ。それは家屋に居るがそこは「ふたり」共に在ることができる「イへ」ではないことを意味した。妻を失った旅人は、妻と共に在る状態、「イへ」に「帰る」ことはできない。さらに、旅人は「イへ」への回帰を希求することもできない。妻と共に在る状態である「イへ」に「帰る」のではなく、妻とは共に在ることができない単なる家屋「家」に「行く」ことを憶良は歌った。憶良は、旅人には「帰る」べき「イへ」がないことを念頭に置き、「家に行きて」と、「行く」という動詞を用いたのではないだろうか。帰京後の旅人が、みずからの家屋を「空しき家」（四五二）と歌い、「イへ」性の消失を痛感していることを思い起こすことができる。

七九五において、男が、妻と「ふたり」共に過こした家屋に、「ひとり」置かれたとき、「いかにか我がせむ」（私は一体どうしたらよいのだろうか）と、何をすればよいか分からなくなることを予期している。帰京後の旅人は、妻と共に世話をした庭や梅の木を歌っていた（四五二、四五三）。旅人は妻と共に、庭の世話をすることも梅の木を見ることもできない。「ふたり」共に在り共に庭の世話を梅の木を見ることにより、それらの物事や行為は意味を持つ。しかし、妻を失った旅人は、「ふたり」共に在ることはできず、共に何か行なうことはできない。物

事や行爲の意味は、「ふたり」共に在るときに成立するものであり、「ひとり」である旅人にはそれを見いだすことはできなかったであろう。帰京し自邸に戻った旅人は、憶良の七九五で歌われている男と同様、「いかに我がせむ」（七九五）と、何をしたらよいかわからなくなったであろう。

さらに七九五では「妻屋さぶしく思ほゆべしも」と歌われている。「妻屋」とは、端屋つまやを原義とする語であり、夫婦が寝るための離れ屋である。共に在り「ふたり」共に寝ることができれば、「妻屋」は「ふたり」の間において意味を持つ。しかしながら、男は共に在ることができず共寝ができない。よって、その「妻屋」は単なる建物であり、「さぶしく」感じざるを得ない。「妻屋」は、妻を失った男にとって、単なる建物である。だからこそ、「妻屋」が「さぶしく」感じざるを得ないのである。ここでもやはり旅人の「空しき家」（四五二）の語が想起される。妻を失った旅人は、妻と共に在ることは不可能である。妻と「ふたり」共に在り共に生活を営むことができない。「家」は、旅人にとって、単なる建物にすぎない。そのことを旅人は「空しき家」と歌うことにより表明したのである。

以上のように考えると、七九五を歌う妻を失った男は、帰京後の旅人が歌った四五二―四五三によって示される思いと同様の思念を抱懐していることが明らかになる。憶良は、帰京後の旅人におとずれるであろう思念に思いを重ねて、歌を歌ったと考えるべきではないだろうか。もしそうであるならば、憶良は、

旅人の思いをみずからの思いとして歌ったことになろう。憶良は旅人と思いを重ね、その思いを歌った。妻と共に在ることができず、妻と共に「ふたり」在る「イヘ」という原点到回帰することも希求し得ない旅人の思いを、憶良は歌ったのである。歌を媒介に、憶良と旅人は、思いを一にし、「ふたり」共に在ることができると、憶良は、旅人と思いを一にし、「ふたり」共に在ることを、歌によって実現しようとしたのである。

## 結

現代を生きる私たちは、まずこの「私」「個人」が在り、その「私」が「家庭」「家族」を構築する、あるいは、「私」は「家族」の一員であると考えることがある。しかしながら、萬葉人の用いた倭語「イヘ」からはそのような思念を看取することはできない。そもそも「イヘ」とは、お互いを「見る」ことにより確認することができる状態であり、視覚的に確認し合うことが可能な者が共に在る状態を意味した。共に在ることが不可能な状態、すなわち「タビ」に置かれたとき、萬葉人は「イヘ」を希求する。萬葉人にとって、在ることの原点は「私」「個人」ではなく、「イヘ」、すなわち共に在ることなのである。すなわち、萬葉人にとって、共に在ることこそが在ることであったのである。よって、「イヘ」と対置される「タビ」とは、共に在ることができない状態であり、その状況においては、原点である「イヘ」を希求せざるを得ず、苦しいことに他ならない。

以上のような萬葉人の思念に則して考えるならば、他ならぬこの「私」が単独で在ることはできない。なぜなら、在ることとは共に在ることであり、「イヘ」であるからである。「イヘ」ではない状態に置かれたとき、すなわち、「タビ」に置かれたとき、「ふたり」共に在ることができず「ひとり」となる。「ひとり」とは在ることができないことであるがゆえに、共に在る状態である「イヘ」を希求するのである。

私たちは、他でもない「私」「個人」が先在し、それが参集することにより「家庭」「家族」は構築されると考えることがある。しかしながら、そもそも、俚語「イヘ」とは共に在ることを意味し、その語を用いた萬葉人は共に在ることこそ原点であると思念していた。彼らは共に在ることができない状態を「タビ」であると考え、そのような状態に置かれたとき「イヘ」を希求した。在ることの原点は、共に在ること、すなわち「イヘ」であったのである。

- 注
- (1) 伊藤博『万葉集の歌人と作品 下』（塙書房、一九七五年、六六頁以下）、同『万葉集の表現と方法 下』（塙書房、一九七六年、一二五頁以下）、同『萬葉のいのち』（はなわ新書、一九八三年、一三二頁以下）などに詳述されている。
  - (2) 伊藤益『旅の思想―日本思想における「存在」の問題―』（北樹出版、二〇〇一年、一七七頁以下）。
  - (3) 八木清治『旅と交遊の江戸思想』（花林書房、二〇〇六年）。

八木氏は、実際の旅にはこれらの三要素が複合的に混在したであろうことを踏まえつつ、この分類が近世の旅を考察する上で有効であると示唆している。

- (4) 芳賀紀雄「終焉の志―旅人の望郷歌」『萬葉集における中國文學の受容』（塙書房、二〇〇三年）は、文學研究の立場から関連する諸文献を精緻に検討した結果、「空」の文字表現について、それは仏教的意味を意識して用いていると見るのではなく、「より具象的な、妻など何者かの不在を表わす語と思議しうる」（三〇三頁）との見解を示す。井村哲夫「報凶問歌と日本挽歌」伊藤博・稲岡耕二編『万葉集を学ぶ』（第四集、有斐閣、一九七八年、所収）。

- (6) 『古義』、『窪田評釈』、『注釈』など。
- (7) 『釋注』など。伊藤博『萬葉集の表現と方法 下』（塙書房、一九七六年、第八章、第二節）は、「かたち」は命あるものの容姿を示す語であり、単なるモノに対しては「かた」の語が用いられていることから、「かたち」は屍体ではあり得ないと指摘し、「家ならば」の「家」は、筑紫（太宰府）の「旅」に対する奈良の「家」であると論じている。

（かわい・ひろよし 筑波大学人文社会科学研究所）